

「わかる」「できる」楽しさを 実感して体力UP!

～授業の充実が運動意欲・体力を育む～



本調査結果では、小学校の9割以上の児童、中学校の8割以上の生徒が、体育・保健体育の授業を「楽しい・やや楽しい」と回答している。児童生徒が、運動種目の特性や楽しさにより多く触れるとともに、「できなかったことができるようになる喜び」を実感できる授業は、運動への肯定的な意識を育む源泉となり、体力の向上への好循環につながる。ここでは、授業での様々な取組により、児童生徒の運動に対する意欲を高め、体力の向上に成果を上げている事例校を紹介する。

調査結果の分析をもとに 計画を立てる

取り上げた事例では、新体力テストや独自アンケート調査の分析結果から得られた課題をもとに、年間カリキュラムの見直しなどを行っていた。姫路市立別所小学校では、時間割配当の調整を体育専科教員が行い、専門的な見地からきめ細かく授業内容の充実を図っていた。調査結果を授業づくりに生かすことが、「できる楽しさ」の実感や運動意欲を高めるうえで大切であろう。

「わかる」「できる」楽しさの 実感で意欲や主体性を育む

授業には、めあてや見通しをもって取り組むこと、できたことをふり

取組のポイント

- 新体力テストやアンケートの分析結果を授業内容へ反映させる
- 「わかる」「できる」楽しさの実感で運動への主体性を育む
- ICT機器の有効活用で授業の充実に取り組む

point

返り、次なる課題をつかむことも大切であろう。小学校では、単元ごとに学習カードを活用し、めあてをもって授業に取り組む事例がみられた。さらに、学習の最後に児童にふり返りを書かせ、できたことや学んだこと、次の課題を整理する事例もあった。教員が学習カードヘアドバイスやコメントを記入することで、児童は自分が認められているという実感をもて、授業への意欲的な取組ができていた。

別所小学校では、学習カードを家庭へ持ち帰らせることで、家族からの賞賛や励ましを受ける機会が増え、運動やスポーツの得意な児童だけでなく、苦手な児童にとっても意欲を高める大きな原動力となっていた。また、同校では、なわとび運動に、1年生から6年生まで共通の進級カードを作成したり、成果発表の機会を設けたりして、児童の意欲を促すとともに「できる喜び」を体感させながら、運動への主体性と基礎体力を培う取組を行っていた。

大館市立第二中学校では、生徒に授業への見通しをもたせる「5分ものさし」を活用したテンポ良くわかりやすい授業で、運動量の確保にも努

めていた。学習のめあてに対して生徒自らが考え、工夫して練習したり、学習内容を自分の言葉でふり返ったりすることで、自己の課題を意識し、主体的に運動へ取り組む意欲を促していた。グループ学習やペア学習による学び合いを効果的に取り入れることで、運動の苦手な生徒も「わかる」「できる」の実感を得る機会が増えていた。その結果、男女の体力合計点や「保健体育の授業は楽しい」と回答する生徒の割合がいずれも全国平均を大きく上回る成果を上げていた。

ICT機器の活用による 話し合い活動の充実

器械運動や表現運動などの領域で、グループごとにタブレット端末を活用している事例もみられた。タブレット端末の活用により、自分の動きのふり返りが効果的に行われていた。また、画像や動画をみながら動きのポイントを確認し合うなど、児童同士の教え合いが活発になり、技能習得への効果的な手立てとなっていた。このような手立てを、特別支援学級児童とのスムーズな話し合い活動に生かす事例もみられた。

取材
記録改善ポイントを視覚的に実感し、活発な教え合いにつなげる
～検討委員による 文京区立林町小学校 訪問調査から～見て実感！意欲が高まる！
教え合いが増える！

文京区立林町小学校は、「文京区ICT機器の効果的活用モデル事業校」として、ユニバーサルデザインの視点から同機器を活用した授業の改善に取り組み、体育の授業では、器械運動や走・跳の運動（特にハードル走）での指導に効果をあげている。取材当日は、跳び箱運動の授業において、遅延再生機能を備えたタブレットとノート型パソコンを併用し、児童が自分の動きの確認やふり返りに活用している姿を見ることができた。「映像確認コーナー」として設置された2つのICT機器の前で「チャレンジタイム」の間、班ごとのローテーションで開脚跳びや発展技への「挑戦」が続けられた。跳び箱を跳び終えた児童が、撮影していた級友に「どうだった？」と笑顔で駆け込んでくる姿からは、自分の動きへの興味・関心と、技能の向上に対する意欲の高まりが見て取れた。教



▲ 友達の動きを撮影し、ポイントを確認し合う

員から手の着き方について助言された児童が、映像を見たとき「ほんとだ！」と大きく声を上げたが、自分の動作を視覚的にふり返ることができるICT機器の活用の有効性を示す一場面であった。

一方、「映像確認コーナー」以外の場所で練習をしている児童へ目を向けると、跳び方について教え合う姿が各所でみられた。デジタル機器の活用が、アナログ的な児童同士での教え合いを促す副次的な効果をもたらすことに改めて気付く機会となった。

味・関心や技能を高める上で有効な手立てとなっている。言葉では伝えにくい部分も、映像を見ながらだと、お互いに良い点や課題点を伝えやすいため、どの児童にとってもシンプルでわかりやすい。こうして、児童相互の自然な教え合いが活性化しているのである。

運動への意欲を育む環境整備

林町小学校では、地域との連携による放課後や土日の校庭・体育館開放「こどもひろば」にも積極的に取り組んでいる。ここでは、専用のボールを用意し、ボール投げやテニスなどを行っている。ルールを児童たちで変える工夫をしながら、異学年で遊びを楽しむ様子もみられている。

また、クラブ活動では「体育館クラブ」を設置し、体育館のできる種目であれば何でも挑戦でき、多様な運動・スポーツ種目を体験できる工夫もされている。

様々な環境の整備が、運動に対する肯定的な意識をもった児童を育てているのであろう。

学校の声

体育の授業では、単元ごとに学習カードを用意しており、授業の最後に児童が学習をふり返ることができるよう、レーダーチャートと今日のめあて、ふり返った感想を書くようにしています。文章にまとめることで、今日何を学んだのか、次の目標が何かを明確にすることができています。



▲ 学習のふり返りを教員が手助けする

“特別”に配慮
しなくても
分かる

さらに、特徴的な取組に、特別支援学級児童との授業交流におけるICT機器の活用がある。特別支援学級の児童にとっても、自分の動作を映像で確認できることは運動への興